

# ちばオピニオン

## 判断ミスが招いた野田虐待死

野田市立小4年、栗原心愛(みあ)さん(当時10歳)の虐待死事件で県の検証委員会が報告書を発表した。中身を読んでとても思ふしくなった。検証委も多大な作業費だっただろう。改めて敬意を表したい。

問題点は多数あるが、ポイントは、まぎれもなく柏原重相(所)「柏兄」の判断ミスが随所にあつたこと、大人の連携の狭間に心愛さんが落ちてしまったことではないか。

### 私論 直言

心愛さんが父からの性的虐待(解)を職員に伝えたり、児童精神科医の所見などがあり、重篤なケースだったにも関わらず、アセスメント(見立て)のミスにより柏兄相は完全に対応を見誤った。正しいアセスメントが実施されなければ別のケースに対応していることになってしまう。ただ、そこで問題なのは、専門集団でありながら、誰一人として重篤なケースだとの気づきやアンテナが立っていないなかったことである。福祉や司法関係者は児童のケースを見た時に「なにか変わった」というセンスのようなも

東京経営短大特任准教授  
少年問題アナリスト

### 上條 理恵氏



◇おなじょうりえ 1963年、静岡清水市出身。船橋市在住。東京経営短大文学部併設大学院児童児童学特別専攻、児童少年問題協議会委員、親子せむと親のサポートセンタースクールアドバイザー、柏原重相のサポートセンタースクールアドバイザー、非行臨床学会創設者。

のが働くが、本ケースでは心愛さんのバックボーンや成長歴に関する情報の収集不足により、本来のランクより軽度なケースと評価されてしまった。

結果、一時保護後、柏兄相から父方祖父母に引き取られたも、父親が子どもに書かされた偽の手紙を受け、虐待再発は認められないと判断され、父親の下に帰されてしまった。

次に、学校や教育委員会など関係機関の問題である。私も多くの被害児童の対応をさせて頂いているが、ほとんどの場合、児童は保護者に虐待されたことを言わないものである。子どもなりに親をおもんばかっているのだと思う。

今回心愛さんが先生に「父親から虐待されている」と書いていたことが、結果的に裏面に書いてしまふ父親の目に触れることとなり、さらに自分を苦しめてしまつたことになってしま

まった。こんな悲しいことがあつていいのだろうか。虐待している保護者が兄相に押し掛けるところもあるもので、兄相から警察に110番通報が入ったり、事前に協議の上対応したりするものもある。

今回は校長はじめ教育委員会が父親の相場に着け書類を作成させられたり、部外秘の個人情報を加害三事書である父親に見せてしまった。これでは教育関係者が父親に支配されているも当然だ。なぜ、警察を呼ぶなり、事前に関係機関で協議をしなかったのか甚だ疑問だ。

関係機関の連携がとて言葉で言っただけではなく、子どもに主軸を置いた関係機関でなければ存在意義はない。せつかくの要保護児童対策地域協議会も全く機能不全になっていたと言わざるを得ない。

どの組織も人材不足、施設の問題など多くの課題が山積する。柏兄相を批判するだけではなく、二度と同様の事件が起きないよう児童福祉に関わる者全員が改めて「自分事」として考え直さなければならぬ。これからの勝負である。

最後に、心愛さんのわずか10年余の人生の最後のシーンが、行へんと叶わなかった大現リゾートの美しい風景であることを心から願う。虐待が人生の最後では、あまりにも残酷過ぎるから。心愛さんの「真福を心から祈りいたします」。

## 「自分事」として考えよう